
特異的言語障害がみられた4事例の 言語発達経過に関する比較検討

山根 律子

1. 目的

発達健康診査でフォロー対象となるもっとも多い理由は「ことばの遅れ」である。ことばの発達は精神発達のわかりやすい指標であると同時に、発達の個体差が大きいことがその理由として考えられる。健診で「ことばの遅れ」を指摘された子どもの中には知的発達障害か境界線児が含まれるが、知的発達全般には遅れがみられずにことばの獲得が遅れる子どもも少なくない。そして、その中には、発達に伴いことばが追いついてくる子どもと、言語発達の遅れが継続する子どもとが含まれている（諸岡他，1991）。

近年、このような知的発達障害を伴わない言語発達の遅れまたは逸脱を示す子どもには、いくつかのタイプがあることが指摘されている。これまでも、経験的には質的な相違について述べられており、知的発達障害を伴わず言語の表出面に限定される遅れの場合には、就学までに追いつく場合が多いといわれてきた。しかし、このような特異的な表出性の言語障害の場合でも、必ずしも発達にともない追いつかないという指摘もなされている（Rescorla, L. and Schwartz, E., 1990）。また、幼児期の言語発達の遅れと学齢での学習障害との関連についての指摘もなされ（遠藤他，1989；小田・阿部1990；小枝，1995），乳幼児期のどのような「ことばの遅れ」が成熟に伴って改善し、どのような遅れが学齢期までハンディキャップを残す可能性があるのかについての検討が必要である。しかし、現段階においては、幼児期の言語面の遅れや逸脱が、追いついてくる場合と学齢期までハンディキャップを残す場合とでどのように異なり、どのように判定できるかを明らかにするだけの情報が得られていない。早期に必要な療育を提供するためには、発達健診で「ことばの遅れ」とされる状況を正確に把握できるだけの事例の蓄積と整理が求められている。

本研究は、これまでとくに明確でなかった言語の表出と理解の両面に遅れを示すが知的発達障害は伴わない「ことばの遅れ」を示した事例について整理し、発達の变化と事例間の比較から幼児期の言語領域に限定される発達障害のサブタイプ化について考察する。

このような知的発達の障害を伴わず、言語領域に限定された遅れや逸脱を示す一群を指して多種の用語が用いられているが、ここでは、特異的言語障害という用語を用いた。

2. 方法

(1) 対象事例

いずれも発達健康診査で「ことばの遅れ」を指摘され、その後学齢まで継続的に指導・フォローを行ってきた事例である。言語発達の遅れ以外の障害はなく、明らかな神経学的異常も見られていない。言語発達の遅れは構音面に限定される遅れではなく、言語そのものの習得にかかわる遅れが見られていた。どの事例も自閉的傾向はなく、通常の対人関係が成立した。また、フォロー期間中に WPPSI または WISC-R の動作性 I Q が80以上になったことが確認されている。

事例1は、男児で微弱陣痛で人口破水による出生。始歩が1歳2ヶ月、3歳時は商標名を中心とした単語を使用した。2語文はなく、話しかけに応じにくかった。文字、数字、マークに強い興味を示した。人なつっこく表情豊かで対人関係はよかった。事例2は女児で帝王切開で出生。始歩は11ヶ月であった。2歳で単語4語程度、3歳で2語文はなかった。理解は表出と同レベルであった。社会的で友達関係がよかった。事例3は、女児で出生時の特記事項はない。2歳で単語があるが3歳で2語文がなかった。3歳でオウム返しがみられた。集中がよく、相手を注視して理解しようとするようすがみられた。事例4は女児で始歩は1歳2ヶ月だった。始語は2歳6ヶ月で斜視を伴う。3歳で2語文を使用した。質問にはオウム返しで会話にならなかった。同年齢児との会話は少ないが、遊びでは対人関係はよかった。いずれの事例も生育環境は一般的であり、保護者は比較的育児に熱心な傾向がみられた。

(2) 検討方法

特異的言語障害の言語発達特徴として指摘されている事項 (Menyuk.P., 1993; Brown, B. and Edwards, M., 1989; Bishop, B.V.D., 1992), 特異的言語障害のサブタイプを区分する特徴として記述されていることから (Allen, D.A., Rapin, I. and Wiznitzer, M., 1988; 山根, 1996) を参考に、言語発達過程の特徴を検討する7つの観点を設定した (表1)。これらの観点到沿い、各事例の指導・フォロー記録から発達特徴を抽出し、比較検討した。

また、すべての対象児に田中ビネー式知能検査、WPPSI または WISC-R、ITPA 言語能力診断検査を実施し、これらの検査結果の発達的变化およびプロフィールについて比較した。

表1 言語発達特徴の観点

(1) 象徴機能の発達
指さしの使用の有無／肯定・否定表現の使用の有無
(2) 音韻論的発達
音韻産出の遅れ，逸脱の有無
(3) 統語論的発達
2語文の使用時期／単語の配列や助詞の使用の適切性
(4) 意味論的発達
初語の遅れ／語彙の獲得の遅れの有無と特徴／意味理解の遅れの有無
(5) 語用論的発達
受け答えの成立
(6) 情報処理
短期記憶範囲の大小／語想起困難の有無
(7) 希な伝達手段の使用
クレーン／オウム返し／ゼスチュアの使用

3. 結果

(1) 知能検査結果の変化（表2）

いずれの事例も，幼児期から学齢期にかけて全体のIQが高くなる傾向がみられた。3歳代の田中ビネー式知能検査では，事例3と事例4ではIQは健常範囲内にあったが，2歳代の項目のうち「丸の大きさの比較」「簡単な命令の実行」が通過しなかった。事例1と事例2は遅れが見られ，これらに加え「語彙」項目も通過しなかった。WPPSIあるいはWISC-Rでは，事例1は4歳から5歳にかけて動作性，言語性ともにIQの伸びを示した。事例2は5歳代では言語性，動作性ともに遅れを示したが，6歳代で言語性，動作性ともに伸び，その後言語性がさらに伸びた。事例3と事例4は，4歳代に動作性IQはすでに100以上であり，5歳代でも変化は見られなかったが，言語性IQは4歳から5歳にかけて大きな伸びが見られた。

言語性のプロフィールでは，事例1・事例3・事例4では「理解」が低い傾向が見られたが，事例2ではこの傾向はみられなかった。動作性プロフィールでは，事例3と事例4が類似した傾向を示し，事例1のプロフィールとは異なった傾向を示した（図1）。

表2 各事例の知能検査結果の発達的变化

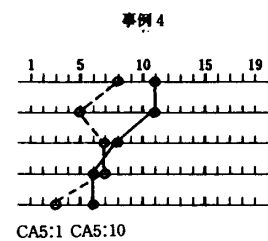
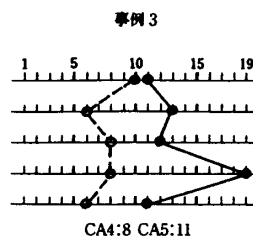
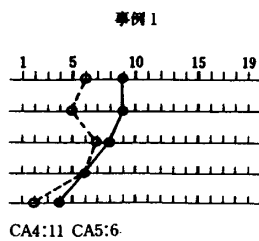
事例 1	事例 2
3: 6 MA2:2 IQ62*	3:11 MA2:6 IQ64*
4: 5 MA3:11 IQ89*	4: 4 MA3:1 IQ71*
4:11 VIQ67 PIQ78 IQ67(W)	5: 6 VIQ45 PIQ68 IQ47(W)
5: 6 VIQ80 PIQ118 IQ98(W)	6: 7 VIQ68 PIQ87 IQ75(WR)
	9: 7 VIQ86 PIQ79 IQ81(WR)
事例 3	事例 4
3:11 MA4:6 IQ106*	3: 9 MA3:2 IQ84*
4: 8 VIQ83 PIQ141 IQ113(W)	4: 3 VIQ不能 PIQ110(W)
5:11 VIQ123 PIQ135 IQ135(W)	5: 1 VIQ71 PIQ109 IQ87(W)
	5:10 VIQ89 PIQ118 IQ107(W)

(*田中ビネー式, (W)WPPSI, (WR)WISC-Rの各検査を使用)

WPPSI

(V) 言語性検査

- 1. 知識
- 3. 単語
- 5. 算数
- 8. 類似
- 10. 理解
- (文章)



(P) 動作性検査

- 2. 動物の家
- 4. 絵画完成
- 6. 迷路
- 7. 幾何図形
- 9. 積木模様

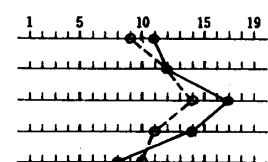
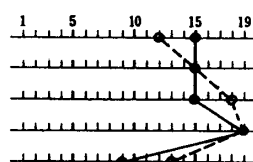
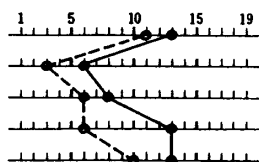


図1 知能検査結果の比較①

WISC-R

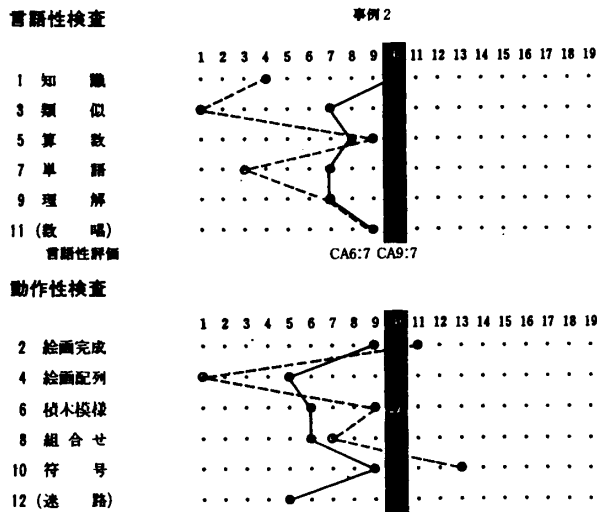


図1 知能検査結果の比較②

(2) ITPA言語能力検査の結果

各事例のプロフィールを図2に示した。事例1と事例3は、この時点ではPLAがCAに追いついていた。事例3は表象水準の表出能力を除き、視覚優位の傾向が見られた。事例1と2では、表象水準の表出能力と自動水準の構成能力に視覚優位が見られ、受容能力・連合能力にはその差が見られなかった。個人内差で、事例3・事例4は「数の記憶」が低く、事例1は高かった。また、事例2は「文の構成」が特に低く、事例1は「ことばの表現」、事例2・事例3は「ことばの類推」、事例4は「絵さがし」が低かった。

(3) 4事例の言語発達の特徴

各事例ごとの言語発達特徴を表3に記した。

①指さし、肯定・否定表現の発達

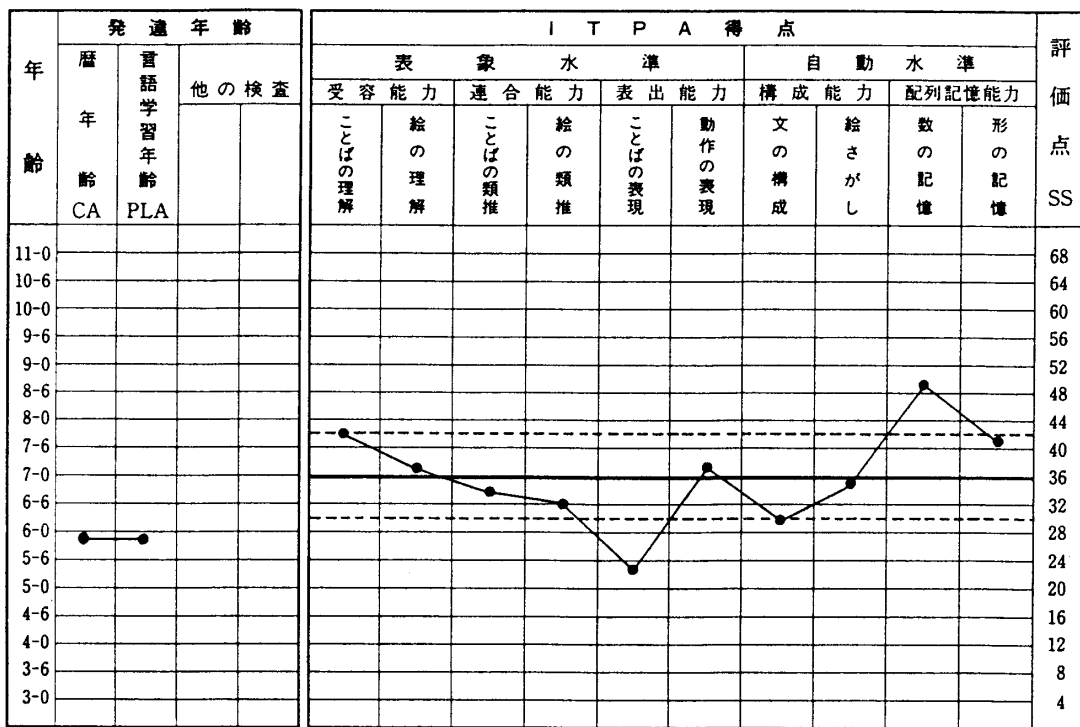
事例1・事例4では指さし、肯定・否定表現の大幅な遅れがみられ、クレーンの使用が長くみられた。事例3も遅れたが、比較的早く習得した。事例2は3歳には指さし、肯定・否定表現とも確立していた。

②音韻論的発達

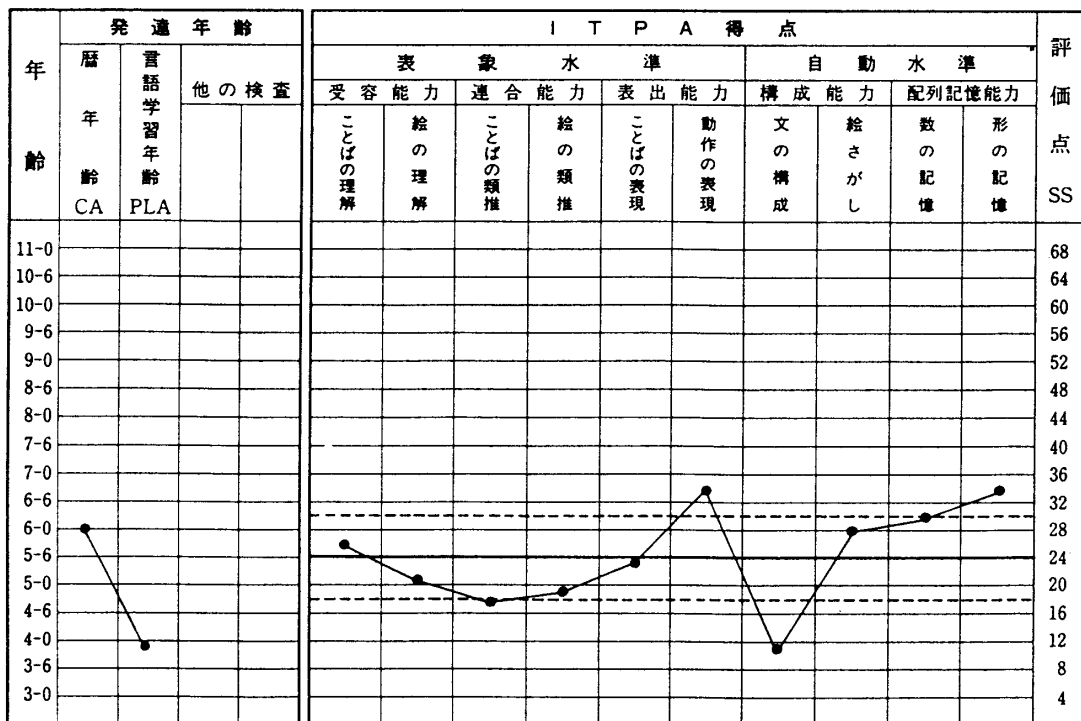
事例1・事例3では発話時から構音は明瞭であり、音韻論的誤りは少なかった。事例4は3歳後半まで不明瞭な発音だったが、発話が安定した後は音韻論的誤りはみられなかった。事例2は発話開始時から一貫しない発話の誤りが多く、学齢まで音の置換や、音韻配列の誤りが見られた。

③統語論的発達

いずれの事例も2語文の使用は遅れた。事例1・事例4では、統語論的誤りは目立たなかった。事例3は、2語文から3語文への移行が早く、助詞の誤りが目立ったが、いったん習得すると誤りが目立たなかった。事例2は、助詞の誤りが続き、助詞をいったん学習した後も使用時の誤りが継続した。



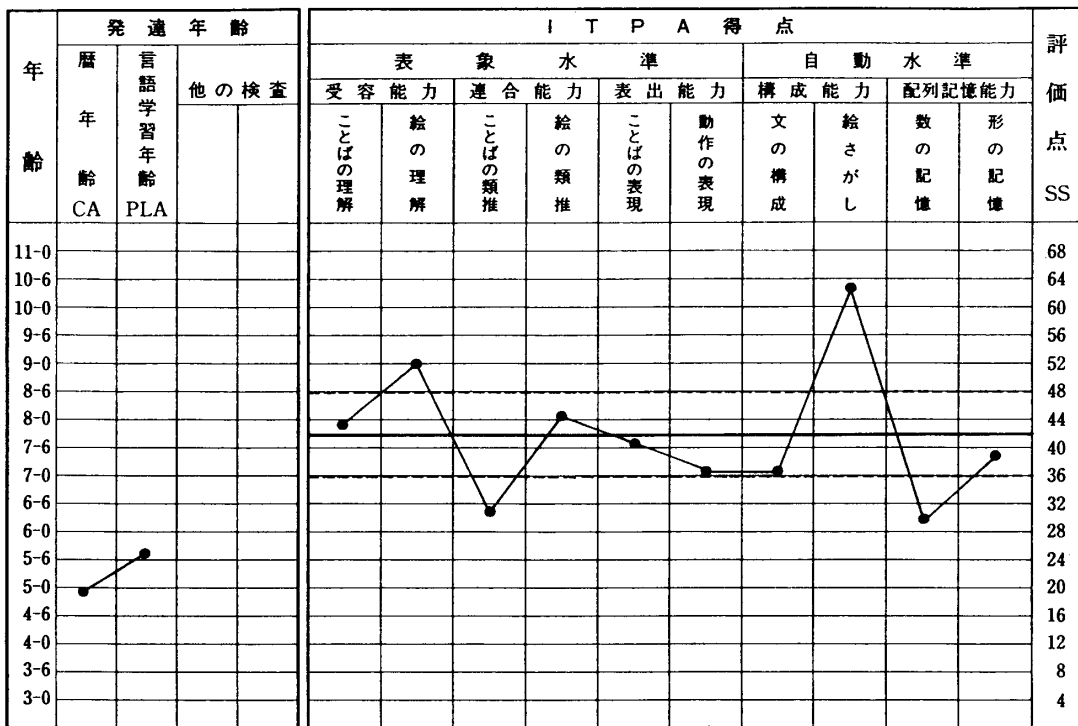
事例 1



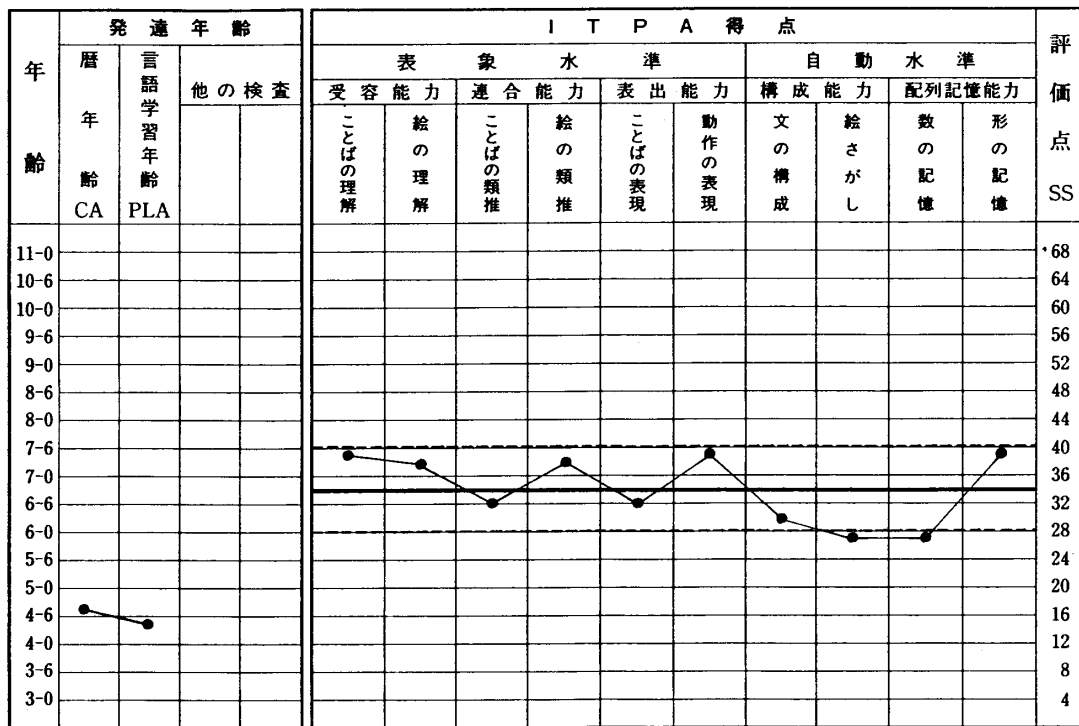
事例 2

図 2 ITPAプロフィール①

特異的言語障害がみられた4事例の言語発達経過に関する比較検討（山根律子）



事例 3



事例 4

図 2 ITPAプロフィール②

④意味論的発達

事例1・事例3は、幼児期前半では語彙の獲得が遅れ、幼児期後期に追いついた。事例2・事例4は、幼児期を通して語彙の獲得が遅れがみられた。事例1・事例3・事例4では理解語彙の発達に偏りが見られ、関係を表すことばや疑問詞の意味の理解が特に困難であった。また、事例1・事例3・事例4は、話しかけにオウム返しをする時期が続いた。田中ビネー式知能検査では、他の課題に比べ「丸の大きさの比較」「簡単な命令の実行」の達成が遅れた。事例2では、語彙の習得には特別な傾向はみられなかった。

⑤語用論的発達

事例1は、話しかけを聞こうとせず、応答が成立しにくい時期を経て、オウム返しする時期が続き、4歳以降に通常の会話が成立した。事例3は、相手の意図を推測して答えようとする努力がみられたが、会話はオウム返しの時期があり、その後4歳頃から会話が成立し始めた。わからないと、一方的に話し続ける時期があり、次第に会話が成立した。事例4は、幼児期前期は問いかけにオウム返しをし、その後自分からは話すが他からの働きかけは避けるようになり、その後通常の会話で成立した。これらの傾向は、言語理解の発達とともに解消した。事例2は、幼児期前期から問いかけには普通に応じていたが、文レベルの会話になると聞こうとせず、一方的に話そうとする時期がみられ、その後問いが長くなると答えがちぐはぐでかみ合わないことが続いた。

⑥情報処理

短期記憶は、事例1は年齢水準よりも高く、事例3・事例4は個体内差でも低かった。事例2は個体内差では高いが、年齢水準よりは低かった。語の想起困難は、事例2で著しく、事例1・事例4ではみられなかった。事例3は、継次処理に比べ、同時処理が優位であった。

⑦希な伝達手段の使用

2歳から3歳にかけて事例1と事例4でクレーンの使用が多くみられた。事例1・事例3・事例4では、いずれも話しかけにオウム返しをする時期が続いた。事例2ではこれらの特徴は目立たなかった。事例1・事例2では、簡単なゼスチュアで補おうとするようすがみられたが、事例3・事例4ではみられなかった。

表3 事例ごとの言語発達特徴

((1)から(7)は表1の観点に対応)

<事例1>

-
- (1) 3歳で指さしの使用はなく、3歳後半から遅れて使用。イヤイヤの首振り、うなずきの使用は5歳近くになって使用がはじまる。
 - (2) 音韻論的誤りは目立たず、通常範囲。構音も明瞭。
 - (3) 4歳過ぎてから2語連鎖の使用が始まる。統語論的誤りは目立たない。
 - (4) 3歳過ぎて商標名をいい始める。初期の語彙は商標名が中心。WPPSI「単語」SS9（CA5：6）、ITPA「ことばの理解」PLA7：1（CA5：9）と5歳代には追いつく。3、4歳では、日常的指示以外の言われたことの意味の理解、疑問詞の理解が遅れていた。
 - (5) 3歳前半は、話しかけを聞こうとせず、話しかけに応答が成立しない。3歳後半から4歳にかけて、話しかけにオウム返しが続き、会話が成立しない。4歳ごろから次第に成立。
 - (6) 短期記憶はよい。語の想起の困難さは、みられない。
 - (7) 3歳10ヶ月頃指さしに代わるまで、要求時にクレーンを使用。3歳後半から4歳にかけてオウム返しが持続。時々ことばを補う簡単なゼスチュアを使用。
-

<事例2>

-
- (1) 3歳までに指さし、イヤイヤの首振り、うなずきを使用。
 - (2) 単音節の聞き取りは可能だが、発話開始時から語の音の一貫しない誤りが多く、音の置換や語音配列の混乱が続いた。
 - (3) 3歳3ヶ月ごろから2語連鎖を用いた。文は、助詞の誤りが多く、長期間続いた。
 - (4) 初語は、1歳6ヶ月からみられたが、3歳頃まで増えなかった。語彙の獲得は遅れた（WPPSI「単語」SS2（CA5：6）、絵画語彙発達検査VA4：2（CA6：4））が、語彙の領域に特別な偏りはない。
 - (5) 非言語的には通常の応答関係が成立するが、文レベルの話しかけの意味がとれず、ちぐはぐな答えになる。自発話は、話しが散漫で何を伝えたいかの理解が難しい。
 - (6) 個人内差では短期記憶は短くないが、年齢水準では短い。会話では復唱できる長さだけ、聞いて理解することができた。発話時に語の想起困難が多く見られ、代名詞を多用した。
 - (7) クレーン、オウム返しは目立たなかった。ゼスチュアは、時々発話を補う時に用いた。
-

<事例3>

-
- (1) 指さしは、1歳6ヶ月時にはみられず3歳では使用した。3歳時、肯定のうなずきは時々見られたが、ほとんど質問をそのまま繰り返して応じていた。
 - (2) 音韻論的誤りは目立たず、構音は明瞭だった。
 - (3) 3歳4ヶ月頃から2語文がみられ、すぐ3語文も用いられるようになった。助詞の誤りが目立ったが、いったん習得すると目立たなくなった。

- (4) 初語は2歳。具体物の語彙は増えたが、非具体物、関係を表すことば、疑問詞などの語の意味理解が遅れた。
- (5) 3歳代では、表情や文脈手がかりを最大限利用しようと相手に集中していたが、ことばだけの問いかけにはオウム返しで応じ、会話の成立が困難であった。4歳頃には、簡単な会話のやりとりが成立したが、わからないと一方的に話し続けるか、話しを変えようとした。次第に通常の会話が成立した。
- (6) 短期記憶は年齢水準に比べ短かったが、追いついてきた。個体内差では短い。語想起困難は目立たなかった。継次処理に比べ同時処理優位であった(CA6:2時点のK・ABC, 1%水準)。
- (7) 3歳代前半にオウム返しがみられた。ゼスチュアで発話を補おうとするようすは見られなかった。

<事例4>

- (1) 指さしは3歳3ヶ月にはみられず、要求はクレーンを使用。3歳9ヶ月ごろ文字・絵への指さしが始まる。同じ頃肯定・否定表現に首振りやうなずきがあいまいに用いられる。
- (2) 喃語がはっきりせず、2歳代では発音が不明瞭でことばにならなかった。3歳後半に発話が安定した後は音韻論的誤りは目立たず、構音は明瞭になった。
- (3) 3歳頃から2語文を使用。助詞や語順等の誤りは目立たなかった。
- (4) 初語は2歳6ヶ月。4歳7ヶ月の絵画語彙発達検査ではVA3歳2ヶ月で語彙発達は遅れた。非具体物、関係を表すことば、疑問詞の理解が特に困難であった。
- (5) 3歳から4歳にかけ、自分からは話しかけるが、他からの話しかけには嫌そうに避けたり、「わからない」とあまり応じなかった。分かる範囲では、通常の会話が成立した。
- (6) 短期記憶は、発達水準でも個体内差でも短い。語の想起困難は目立たなかった。
- (7) 2歳後半から3歳前半にかけて、オウム返しによる応答、クレーンの使用が多くみられた。その後どちらも減少した。ゼスチュアによりことばを補おうとするようすは見られなかった。

4. 考察

(1) 特異的言語障害児の知的発達経過

本研究の4事例は、フォロー結果から見ると動作性IQが80以上になったことから知的発達障害とは区分される特異的言語障害と考えられた。しかし、3歳代の田中ビネー式知能検査では、事例3と事例4はIQでは健常範囲にあったが、事例1・事例2は遅れを示した。その後のWPPSIの変化をみると、事例1と事例2は言語性、動作性がともに伸び、事例2はその後に言語性がさらに伸びて健常範囲に入った。また、当初から動作性が高かった事例3と事例4は、言語性のみ伸びて健常範囲に追いつくという経過をたどった。

このような経過から、言語の表出と理解とともに遅れを示す特異的言語障害では、知能検査で測定される知的発達水準は年齢により変化し、一部の知的機能が通常よりも遅れて発達する傾向がうかがえた。そこでは言語領域のみが遅れる場合と非言語性領域にも遅れが見られる場合とがあり、非言語性領域の発達を追うように言語領域が発達する傾向が見られた。

（2）言語発達過程から見た4事例のサブタイプ化

特異的言語障害が均質の一群ではないことは一般的に認められるところであるが、これらがどのようなサブタイプを含むかに関しては未だ定説はない。レイピン(Rapin,I.)とアレン(Allen,D.A.)らは、神経心理学に基づいたサブタイプ化を提案し、言語の表出面だけでなく理解面にも障害をもつサブタイプとして高次処理の障害が想定される意味-語用障害症候群、語彙-統語障害症候群、また理解と表出の障害として言語聴覚失認と音韻-統語障害症候群を設定した(Allen,D.A.,Rapin,I. and Wiznitzer,M.,1988)。この内言語聴覚失認は、音韻認知の最重度の障害であり、ことばがないか、非常に限られた表現しか持たない群とされ、本事例の状態とは合致しない。

これ以外の理解の障害を伴うとされるサブタイプの言語発達特徴を、理解、産出（意味/統語/音韻）、語用の各領域ごとの障害の程度により示すと、意味-語用に障害を示す群は理解の障害が大きく、産出における意味と語用に大きな困難さを持つが統語の障害は小さく、音韻には遅れはない。語彙-統語障害症候群は喚語困難を特徴とし、理解の障害は小さく産出では意味と統語に障害があり、音韻と語用には障害がない。そして、音韻-統語面に障害を示す群は、理解の障害があり、意味と語用には遅れがないが、産出の音韻と統語に障害が著しいとされる(Brown,B. and Edwards,M.,1989)。

これにそって本研究の4事例の言語発達経過を見ると、理解面の特徴では、事例1・事例3・事例4は、日常的な会話でいわれたことの意味を理解する上での遅れがあり、とくに抽象的なことばの理解が遅れる特徴が共通していた。事例2では短期記憶範囲を越えた文を聞いて理解することに困難さを示したが、先のような特徴は見られなかった。産出面では、語彙の習得はいずれの事例も遅れたが、語彙が具体的名称に偏り、非具体物や関係を表すことばの習得がとくに困難な傾向が事例1・事例3・事例4でみられた。これらは理解困難な語彙の特徴と共通した。事例2には語彙の偏りはみられなかった。統語では、2語文の開始の遅れはいずれの事例にも共通した。助詞の習得と使用では、事例3は習得期に一時的に混乱を示したものの習得後は目立たなくなったが、事例2は習得後も助詞の使用に混乱が続き、持続する統語面の困難さを有した。事例1・事例4では統語の困難さは目立たなかった。音韻では、事例2は単語レベルから誤りが多く、文レベルの発話になっても音韻の混乱が続いた。事例4は単語の習得期に音韻の不明瞭な時期があったが、習得後は明瞭になった。語用面では、事例1は言語習得期に応答性が低い特徴を示した。事例2・事例3・事例4はそのような特徴は目立たなかったが、相手の話を聞こうとせず、自分勝手に話し続けたり、避けようとする傾向があった。事例2は、年少時は普通に会話が成立したが、文レベルの会話になると聞こうとせずに一方的に話そうとする時期がみられた。

これらの言語発達経過からみると、言語発達の各領域における「遅れ」はどの事例にも共通しているが、特徴的な傾向の有無と困難さの持続を指標とすると、事例1・事例3・事例4と事例2とは言語発達の困難さを示す領域に差がみられた。事例1・事例3・事例4は、言語の意味理解、特定の語彙の習得、前言語期の象徴機能の発達に特有な困難さがあり、音韻面や統語面での困難さは少ない共通性がある。一方事例2では、言語の理解面にも継続した遅れがあるが、先の3事例のような特徴はなく、音韻面、統語面に継続した困難さが示された。これらの結果から、事例1・事例

2・事例3はレイピンらが仮定した意味-語用障害のサブタイプに、事例2は音韻-統語障害のサブタイプに相当するものと考えられ、日本語の特異的言語障害児群においてもレイピンらのサブタイプの妥当性を支持した。

意味-語用障害に相当すると考えられた3事例の知能検査結果では、田中ビネー式知能検査の「丸の大きさの比較」「簡単な命令の実行」項目が他の項目の通過状況に比べて大きく遅れる傾向と、ある時期 WPPSI のプロフィールでは「理解」がとくに遅れる傾向が共通した。この点でも、意味理解に特有な困難さをもつことが確認された。そして、3事例は指さしや肯定・否定表現など前言語期の象徴機能発達指標と考えられる行動の遅れをも共通して示したことから、意味理解の特有な困難さは前言語期の象徴機能の遅れと共通した障害基盤をもつことが推定された。

一方、レイピンらは、意味-理解障害のサブタイプを意味領域の遅れと語用領域の特性とを合わせもつタイプとして想定しているが、本研究で同タイプに近いと考えられた3事例間には語用面で相違点が見られた。ことばを話し始めた時期の応答性の低さは事例1のみの特徴であり、事例3・事例4ではこのような傾向はみられていない。語用的な特徴としては、事例3・事例4は話し始めた段階では質問に答えようとせず一方的に話す傾向がみられたが、この特徴は一時期事例2でもみられ、わからない会話を回避するための手段であるように思われた。この点から、事例3・事例4は、意味理解の基礎である象徴機能の発達の遅れが基本障害であり、語用面の障害は2次的なものである可能性が示唆された。しかし、語彙習得の偏りや前言語期の象徴機能の遅れは事例1で著しく、事例3・事例4は語彙の偏りは軽く、象徴機能の遅れからの回復が早かったことから、語用面での上記の差は象徴機能の遅れの重症度により生じた可能性も考えられる。意味-語用障害のサブタイプでは、意味面の障害と語用面の障害とが不可分のものかどうかについてさらなる検討が必要と考えられた。

5. まとめ

ことばの表現だけでなく理解にも遅れを示した特異的言語障害児4事例の言語発達経過から、言語発達の遅れは同質ではなく、いくつかのタイプに分けられることを示した。言語の各領域ごとの遅れや逸脱の特徴から、本研究対象とした4事例は象徴機能の特有の遅れが示唆される意味領域の障害を基礎とするタイプと、音韻、統語面の困難さを基礎とするタイプとに相当すると考えられた。意味領域の障害を基礎とするタイプでは、語用面の障害を伴うとされているが、この点については本事例では個体差がみられ、意味領域の障害と語用領域の障害の関連については今後の課題として残された。

意味領域の障害は、言語だけでなく概念や思考レベルの障害と位置づけられ、音韻-統語領域の障害は、音韻認知を中心とした符号化レベルの障害と考えられる。障害の領域やレベルが異なれば、効果的な言語発達援助の方法も異なることが予想され、個々の障害に対応した指導に向けて、特異的言語障害児における個々の特性を把握する重要性を示唆した。また、本事例ではいずれも通常より遅く言語性知能が発達し、健常範囲に追いついてくる経過がみられた。特異的言語障害児は適切

な対応がなされれば幼児期から学齢期にかけて急速な伸びを示す特性を配慮し、この間の発達を継続して支える発達支援のしくみが必要であることをあらためて示唆した。

本研究は事例の発達を追った記述的資料に基づいた検討であり、客観性が乏しい。今後、本研究の結果から、サブタイプ化の指標として有効であると示唆された事項をもとに言語発達の特徴を客観的に測定できる評価法を確立し、それらに基づいたフォローアップ研究の積み重ねが必要である。

（やまね りつこ 社会福祉学科）

参考文献

1. Allen, D.A., Rapin, I. and Wiznitzer, M. 1988 Communication Disorders of Preschool children: The physician's responsibility, *J. of Developmental Behavioral Pediatrics*, 9, 164-170.
2. Bishop, D.V.M. 1992 The understanding nature of specific language impairment, *J. of Child Psychol. Psychiat.*, 33, 3-66.
3. Brown, B. and Edwards, M. 1989 *Developmental Disorders of Language*, Whurr Pub.
4. 遠藤正恵・斉藤久子・石川道子・今橋寿代・山田理恵・和田義郎・後藤明子 1989 発達性言語遅滞児の追跡調査 I, *小児の精神と神経*, 109, 217-226.
5. 小枝達也・汐田まどか・赤星進二郎・竹下研三 1995 学習障害児の実態に関する研究 (第2報) : 3歳児健診における学習障害リスク児はどんな学童になったか, *脳と発達*, 27, 461-465.
6. Menyuk, P. 1993 Children with Specific Language Impairment (Developmental Dysphasia): Linguistic Aspects, In Blanken, G., Dittmann, J., Grimm, H., Marshall, J. and Wallesch, C. (Eds.) *Linguistic Disorders and Pathologies*, Walter de Gruyter.
7. 諸岡啓一・有本潔・多田博史・松尾多希子・柳川悦子 1991 言語発達遅滞児における精神・言語発達の変容と療育機関について, *小児の精神と神経*, 31, 201-208.
8. 小田昇・阿部和彦 1990 3歳児健診時に発達性の言葉の遅れを示した児の追跡調査—予後の予測における多動傾向の意義—, *精神医学*, 32, 391-394.
9. Rapin, I 1996 Practitioner Review: Developmental Language Disorders: A Clinical Update. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 37, 643-655.
10. Rescorla, L., and Schwartz, E. 1990 Outcomes of specific expressive language delay (SELD), *Applied Psycholinguistics*, 11, 393-408.
11. 山根 律子 1996 特異的言語障害とそのサブタイプ —早期療育に向けての研究課題—, *つくば国際大学研究紀要*, 2, 59-71.

A Comparison of Language Development in 4 Specific Language Disorders

Ritsuko Yamane

This is a follow-up study of 4 children with handicaps in both language comprehension and language production. They don't have mentally handicaps, nor have sensory handicaps. It is considered that their language handicaps are not pervasive disorder, but specific.

As a result that followed the language development of 4 cases, it is suggested that 3 cases have difficulty in semantic area and one case has difficulty in phonological area. Though all cases showed the delay of verbal intelligence in the infancy, they caught up with normal range by 10 years old. As these result, it is supported that specific language disorders will be divided into some types. It is necessary to make preparation for intervention program corresponding to subtypes of specific language disorders.

Key Words: specific language disorders, follow-up study, subtypes.